

銭形平次捕物控

遠眼鏡の殿様

野村胡堂

青空文庫

一

「ヘッヘッ、ヘッ、ヘッ、近頃は暇ひまで暇で困りやしませんか、親分」

「馬鹿だなア、人の面つらを見て、いきなりタガが外はずれたように笑い出しやがつて」

「でも、銭形の親分ともあろう者が、日向ひなたにとぐろを巻いて、煙た草ばこの煙を輪に吹く芸当うきみに浮身うきみをやつすなんざ天下泰平じゃありませんか。まるで江戸中の悪者が種切れになつたようなもので、ヘッ、ヘッ」

「粉煙草がひとつまみしか残っていないのだよ。芸当でもやらなきや、煙が身につかねえ」

「煙草の煙を噛みしめるのは新手ですね。尤もあつしなんかは、猫が水を呑む時のように、酒を嘗めて呑むてを考えた。一合あると請合い一刻は楽しめますぜ」

親分も貧乏なら、子分も貧乏でした。八丁堀の旦那方は

じめ、江戸の岡っ引の大部分が、付け届けと役得で、要領よく贅沢に暮している中に、平次と八五郎は江戸中の悪者を顛え上げさせながらも、相変らず潔癖で呑気で、その日その日を洒落のめしながら暮しているのです。

「呆れた野郎だ、そんなことをしたら呑む下から醒めるだろう。」

それより鼻の穴から呑んでみねえ、とんだ利きが良いいぜ」

「ところで、そんなに暇なら、少し遠出をしてみちやどうです」

八五郎は話題を変えました。相変らず事件の匂かいを嗅かぎ出して、平次を誘いに來た様子です。

「どこだえ。正燈寺しょうとうじの紅葉もみじには遅いし、觀音様の歲としの市いちには早いが——」

「いやに鬼門きもんの方ばかり気にしますね——、実は四谷伊賀町よつやいがまちに不思議な殺しがあつたそうで、弁慶べんけいの小助親分が、銭形の親分を連れて來るようにと、使いの者をよこしましたよ」

「四谷伊賀町なら裏鬼門だ。が、赤しい襦かけとは縁がないな」

「その代り殺されたのは、山の手一番の色娘に、もとを洗えば品

川で勤めをしていたという、凄い年増ですよ。曲者は綺麗などころを二人、虫のように殺して、こうスーツと消えた——」

八五郎の話には身振りが入ります。

「お前に言わせると、殺された女はみんな綺麗で、無事に生きている女はみんなお多福だ、——先ア歩きながら話を聴こうよ」

明神下から九段を登って、四谷伊賀町へはかなりの道のり

ですが、初冬の陽ざしが穏やかで、急ぎ足になると少し汗ばんで来るのも悪い心持ではありません。

「ね、親分、もとはと言えば遠眼鏡が悪かつたんですよ。あんな物がなきや、二人の女が殺されずに済んだ筈です」

「へエ——、遠眼鏡ね。そいつは年代記ものだけ。遠眼鏡の人殺

しなんてえのは」

「眼鏡で叩き合いをやったわけじゃありませんよ。こういうわけ——」

「——」

「四谷伊賀町に、三千石の太身たいしんで伊賀井大三郎様という旗本がありますかね、無役むやくで裕福で、若くて好いいい男で、奥方がみつともなくて、道楽強いと来てるからたまりませんや」

「まるでお前とあべこべだ」

「その殿様が近ごろ和蘭おらんだはくらひ舶来の素晴らしい遠眼鏡を手に入れ、二階の縁側から、あちらこちらと眺めるのを楽しみにしていた——
——というのがことの起りおこで」

「――」

平次も黙ってしまいました。話がどうやら重大らしくなつていくのです。

「その遠眼鏡の中へ、いきなり滅めつぼう法綺麗な娘の顔が映うつつてとろけるようにニツコリしたとしたら、どんなもんです、親分」

「俺はそんな覚えはないよ」

「殿様はブルツと身ぶるいして、その晩から寝込んでしまった」
「風邪を引いたのか」

「この道ばかりは錢形の親分でも見立てがつかねえ、――手っ取り早く言えば、恋やまいの病ですよ。三千石の殿様が、町内の小間物屋の娘お君坊に惚ほれてしまったんだから厄介だ」

「たいそう古風なんだね」

「お君は山の手一番と言われた好い娘ですよ。年は十九で色白で愛嬌あいきようがあつて、色っぽくて、糝粉細工しんこのように綺麗だ——裏へ出て洗濯か何かして、腰を伸ばして家の中の妹と話をして、思わずニツコリしたところを、二三十間先けんから遠眼鏡で見た殿様は、自分へ見せた笑顔だと思ひ込んでしまった、——恐ろしい早合点ですね」

「——」

「それから夢中になつて、朝から晩まで二階に登つて、遠眼鏡と首つ引だ。奥方の弥生様やよいはあばたで大嫉妬やきもちと来てるからたまらない。早くも殿様の素振りに気が付いて、目当てが町内の小間物

屋の若くて綺麗な評判娘とわかると、殿様の胸むなぐら倉つかを掴んで、遠眼鏡をねじり合う騒ぎだ」

「早く筋だけ話せよ。お前の話には、相変らず無駄が多くてかわない」

「筋だけ運んじや木戸きど銭せんになりませんよ。四谷は遠い、ゆつくり聴いて下さいよ」

「講こうしやく釈しやくの気でいやがる」

「殿様は人ひと橋はしを架かけて清水屋に掛け合い、娘お君を奉公に出せという無理難題だ。奉公というのは、申すまでもなく手掛け奉公だが、清水屋にはゆくゆくはお君と一緒にするつもりで、親類から貰もらった市太郎という養子がいる」

「面倒だな」

「その人橋の中には、伊賀井家へ出入りしている植木屋辰五郎の女房で、お滝という凄いのがいる。こいつはもと品川で勤めをしていた三十女で、以前は武家の出だというが、自堕落の身を持もちく崩ずして、女の操みさおなんてものを、しゃもじの垢あかほどにも思っちゃいない。伊賀井の殿様に悪智恵わるちえをつけて、八方から清水屋の父娘おやこを責めさいなんだ。金づく、義理づく、それでもいけないとなると、今度は腕うでづくで脅おどかした」

三千石の裕福な殿様が、吹けば飛ぶような裏町の小間物屋に加えた圧迫の手は、残酷で執拗しつようで悪辣あくらつを極きわめたものでした。

品川の女郎上おがりのお滝——恥も外聞もとうの昔に摺すりきらし

てしまった凄い年増が軍師で、十九娘のお君が、好色の旗本の人ひ身御供とみごころに上るまでの経緯いきさつは、平次にはよくわかるような気がするのです。

ガラツ八の話はまだ続きます。

「——一方では伊賀井の殿様の奥方——弥生の方は、御主人の氣違い沙汰とりのぼせに取逆てい上さて、これは本当に氣が変になり、ひと間に押し込められて、体のいい座敷牢暮ざしきろうしをするようになった。それをまたいいことにして、いよいよ清水屋を説き落し、大枚たいまい三百両の支度金したくきんまで投げ出して、いよいよ明日の晩は、お君を伊賀井家に乗込きまませると決きまった——昨夜ゆうべになって、肝心かんじんのお君は自分の家の裏口で、植木屋の女房のお滝は、お湯の帰りをそこから

一丁とも離れていない おかりやよこちよう 御飯屋横町の入口で、背中からひと突きにやられて死んでいるじやありませんか。お滝なんぞいい気味だ
が——」

「なんという口をきくのだ」

「へエ、相済あいすみません。お滝はどうせ百まで生きていたって、人様のためになる人間じゃないが、清水屋の娘のお君が可哀想でありません。それを狙ねらって爪を磨といだ旗本の殿様なんか穀こくつぶしみたいなものだ——」

「少しはたしなめよ八、人に聴かれたらうるさいことになるぞ」「相済みません。が、あつしは本当のことを言っているんだ——
山の手一番と言われた娘を、十九で殺しちやもったいなさ過ぎま

す。ね、親分。十手冥利にこいつは是が非でも下手人をあげて、思い知らさなきや虫が納まりませんよ」

八五郎の拳骨げんこつは、冬の陽を受けて宙に躍おどるのです。

二

伊賀町の清水屋には、土地の御用聞ごようきき、弁慶べんけいの小助が待つておりました。武蔵坊のような大男で、豪力ごうりきむそう無双と言われておりますが、根が人の好い方で、日頃錢形平次の逞たくましい智恵に推服すいふくし、むずかしい事件があると、なんの瘦やせ我慢もなく、後輩の平次を引っ張り出して、その明智めいちの裁さきに享樂するといった肌合さばい

の男です。

「おや、銭形の親分、よく来てくれたね。出不精でぶしょうの親分のことだから、どうかと思つて心配したが」

弁慶の小助はニコニコしながら迎えました。

「弁慶の親分の手伝いなら、どんな無理をしても来るよ」

平次はなんの世辞もなく、心からこう言える氣持でした。

「有難う、そう思つてまだ入にゆうかん棺かんもさせずにあるんだ。まア見てくれ」

小助は不安と焦しょうそう躁そうにかき廻されて、日頃の落着きを失つてゐるらしい店の者や近所の衆をかきわけて、奥のささやかな部屋に平次を案内しました。

貧^{まず}し氣^げな調度の中に、二枚屏風^{びようぶ}を逆様にして、お君の死体は寝かしてありました。枕^{まくらもと}許^{もと}には手習机^{てならいづくえ}を据^すえて、引つきりなしに香^{こう}を捻^{ひね}っている五十男は、お君の父親で清水屋の亭主の市兵衛でしょう。

そのそばに小さくなってシクシクと泣いているのは、十六七の小娘^{みめうる}で、眉目^{みめ}美^{うる}わしさや、拔群^{ばつぐん}の可愛らしさからみても、それはお君の妹のお吉でなければなりません。

お君の死顔は死の駭^{おどろ}きさえも拭^{ぬぐ}い去られて、世にも清らかな美しいものでした。『山の手一番』と八五郎の形容したのは、少しの誇張でもなく、血の氣を失って青白くなつた頬^{ほお}に、不思議にほんのりと桜色が残^{かす}つて、霞^{かす}む眉も長い睫毛^{まつげ}も玉^{たま}を彫^{きざ}んだような柔

らかい鼻筋も、美しい唇の曲線もまさにこの世のものとも覚えぬ
尊い清らかさです。

死骸を少し動かして、襟のあたりをはだけて見ると、左の背――
ちようど肩胛骨けんこうこつの下あたりに、小さく肉の炸裂さくれつしている
のは、ここから心臓しんぞうまで、ひとえぐりにした刃物の跡あとでしょう。

「八、この傷をどう見る」

平次は真っ白な娘の膚はだに、不気味にはじけた傷痕きずあとを指さしま
した。

「棒で突いたようですね」

「いや、細身の刃物で、えぐったのだ」

「へエ、念入りなことをしたものですね」

「恐ろしい手際てぎわだよ」

死骸の玉の肌をもとの通りに包んでやると、平次は少し席すざを退ひつて線香の煙の中に掌てを合せます。

「何事も隠さずに言つて下さい。娘さんが伊賀井家に上がるのを、はたからひどく嫌いやがつた者がある筈だが——」

平次は父親の市兵衛を顧かえりみます。

「みんな嫌がりました。娘は申すまでもなく、この私も、ここにいる妹も、倅せがれの市太郎も」

「それほど嫌なものを、どうしてやる気になつたのだ」

「親分、町人は弱いものでございます。金と権柄けんべいと、いやがらせと、脅おどかしと、攻手せめてはいくらでもあります。同じ町内に住んで

三千石の殿様に睨にらまれちや、動きがとれません」

市兵衛は娘をここまで陥おとし込んだ、大身の旗本の無情な要求を、娘を殺した下手人よりも憎んでいる様子です。

「昨夜ゆうべのことを詳しく聴きたいが」

「私は帳場ちようばにおりました、——このお吉の方がよく知っておりますが」

平次は妹娘のお吉の方を振り返りました。

「晩のお支度が済んだ時でした、——酉刻半むつはん（七時）の火の番の

拍子木ひょうしぎが通ったすぐ後だったと思います。外で何か物音なんがした

と思うと姉は急にソワソワして、自分の部屋へ行つていつも好きで着るちよいちよい着の銘仙めいせんの袷あわせと着換え、あわてて外へ出よ

うとするので、——姉さん今頃どこへ行くの——と訊^きくと、あのちよいとそこまで——と、ろくに返事もせずに出かけましたが、間もなく井戸端のあたりで、姉さんの声で私を呼ぶような、変な押し潰^{つぶ}されたような声がするので、お仕事で使^てっていた手燭^{しょく}を持^もつて飛び出して見ると——」

お吉はそこまで言^いつて、さすがに絶句しました。昨夜の恐ろしい光景を思い出したのでしよう。この娘は見掛けの弱々しい可愛らしさに似^にず、性^{しょうね}根^{しつ}に確^たかりしたものがあ^あるらしく、昨夜の話も整然として筋も乱れません。

「お吉の大声を聞いて私も店から飛んで来ましたが、その時はもうお君はこと切れて、正体ありません。お吉は木戸の外にチラ

と人影が見えたようだ、すぐ往来へ飛んで出ましたが、まもなく戻つて参りました。それから間もなく――」

父親の市兵衛もここまで話して来て、言葉は涙の洪水に押し流されるのでした。

「――そのとき死骸の側に、伝馬町てんまちようの万次という野郎がウロウロしていたというんだ、――男おとこつ振りは好いが、一向他愛のない安やくざだよ。その場から煙のように消えてしまったのだ。今朝になって、賭場とばで見付け出し、いちおう縄を掛けて自身番に預けてあるが、何を訊きいても知らぬ存ぜぬだ」

弁慶の小助は側からくちをいれました。

「刃物は持つていなかったのか」

「ヒ首あいくちを持っているよ、幅の広い出刃庖丁のような奴だ。尤ももつと

それには血もなんにもついちやいないがね」

「昨夜井戸端ゆうべで見付けられたとき、なんにも言わなかったのかな」

平次はもういちど主人の市兵衛に訊くのでした。

「何か変なことを申しましたよ、——お君が殺ころされているんだ、俺と逃げる筈だったが。畜生ツ、誰がこんな虐むじたらしいことをしやがったんだ——と言ったように」

「養子の市太郎は？」

「そのとき、庭木戸から入って来たようです。よくはわかりませんが」

市兵衛の言葉には何か割りきれないものがあります。

「養子の市太郎と、娘のお君との仲は好よかったのかな」

「決して仲が好いとは申されませんでした。市太郎は堅かたい良い男ですが、商売熱心で地味で、——若い娘などに好かれる男ではございせん、——でも」

市兵衛は何か続けようとして口を緘つぐみました。遠い親類の次男で、商人の市兵衛が堅いの見込んで貰った養子で、山の手一番の娘が氣に入る筈ありません。

「その娘が、養子の市太郎を嫌って、やくざの万次と親しくなっていたのだよ」

弁慶の小助はそつと平次の耳に囁ささやきます。

「世間の噂うわさが私の耳にも入ります。人もあろうに、小博奕こばくちを渡世とせい

にしている、安やくざと懇ろねんごになつては、娘の一生も台なしでございましょう。お旗本の妾めかけに上げては、私の心持が済みませんが、それでもやくざ者の配偶つれあいにするよりは増ましでございます。伊賀井様のお望み通り、急に娘を奉公に差上げる氣になつたのは、そんなことから——」

小博奕打の女房にするよりは、まだしも三千石の旗本の妾にした方が——といった考え方は、善悪はともかく江戸の町人のそれは常識だつたのです。

平次はそこから昨夜娘が刺された場所——お勝手口の井戸端を廻りました。まだ宵の^{よい}うちの出来事で、内外の戸締りもなく、庭は打ちつづくお天氣に踏み固められて、足跡一つ残つてはおりません。井戸端に流れた血潮は洗い清めたところで、土が少し^{しめ}湿つておりますが、そんなのは平次の探索に何の役にも立たなかつたのです。

「あれは？」

「養子の市太郎だよ」

弁慶の小助が引合せてくれたのは、二十五六の^{がんじょう}頑丈な男で、色も黒く、^{めはなだち}眼鼻立も大きく、その上横肥りで、^{ぶこつ}武骨で、^{まった}全く女子供に好かれるたちの男ではありません。

「御苦労様でございます」

小腰を屈かがめて行き過ぎようとするのを、平次は呼び留めました。
 「昨夜ゆうべお前はどこへ行っていたんだ。お君が殺される少し前だ」

「へエ」

「はつきり言わないと面白くないことになるぜ。お前はお君を怨うらんでいた筈だし、——背後うしろからひと突きして、外へ出て改めて引返して来る手もあるわけだ」

「とんでもない。親分さん」

「だから、どこへ行っていたか。はつきり言うがいい」

「申さなきやありませんか。親分さん」

「当り前だよ。隠しおわせることじゃあるめえ」

平次の態度は峻烈しゅんれつで少しの容赦ようしやありません。

「私は福寿院ふくじゅいんの境内けいだいへ行つて、半刻はんとく（一時間）ばかり人を待つておりました」

「誰を？」

「お二人——お君と万次を待つていました」

「？」

「お君が伊賀井様へ奉公に上がることにきまると、万次はお君に家を逃げ出すようにすすめました、——私はフトしたことで二人の相談を聴いたので、間違ひはございません、——万次は小田原とかに叔母しよぼがいるそうで、そこまで行つて、暫く身を潜めひそめ、路用ろようを拵こしらえて上方かみがたへでも行こうという話でした」

「？」

「こんなことを申してはなんです、万次という男は信用のできる男ではございません。お君を騙だまして夜逃げなどをして、いつお君を捨てて金にするかあやしいものでございます」

「――」

「現に半歳はんとしほど前にも植木屋の辰五郎の女房――あの殺されたお滝ですが、――あの女と妙な噂を立てられ、殺すの生かすのとおひと騒動をしたばかりでございます。それが納まると今度はお君にチョツカイを出し、なんにも知らないお君は、万次の男つ振りと口車に乗せられて、夜逃げまでする気になったのでしよう」

「――」

「明日はいよいよ伊賀井様に上がるといふ前の晩の昨夜、正西^{しょうむ}刻半^{つはん}（七時）に福寿院の境内で落合おうという約束をした様子でした。私はそれを胸一つに納めて、少し早目に福寿院の境内に参り、二人の顔の揃^{そろ}ったところで、よく話をして無分^{むぶん}別^{べつ}な夜逃げなどを留めようと思つたのでございます。——ところが酉刻^{むつ}（六時）から酉刻半（七時）まで待ちましたが、二人とも姿を見せません。尤も酉刻半^{もつとむつはん}の火の番の拍子木の通るのを聞くといつしよに、万次は来たようでしたが、四方^{あたり}を見廻してもお君の姿が見えないので、舌打ちして此方^{こつち}——お店の方へ来たようでございます。私もその後から直ぐ参りましたが——」

「それからどうした」

「お君は殺されて、井戸端は大騒動でございました。そして万次は暫くウロウロしておりましたが、さすがに名乗って出ることもできなかつたものか、すぐすごどこかへ行つてしまいました」

「万次がお君を殺した様子はなかつたのか」

平次は突つ込んだことを訊たずねます。

「それは見ませんでした、——二人は逃げる相談をしていたくらいですから、万次が馬鹿でもお君を殺す筈はないと思いますが——」

市太郎の言葉はまことに穏当ですが、しかし万次が下手人でないという保証にはなりません。

「ところで、お君はお前をどう思っていた」

平次の問いはますます深刻になります。

「やくざ者の万次と夜逃げの相談をするくらいですから——尤も^{もつと}

私は諦めておりました。どうせお君の気に入る筈はありません」

「——」

「父親もそれを気にして、お君はあの通りの我儘者^{わがままもの}だから家に

置いたところで、お前とうまくいくわけはあるまい。思い切つて

伊賀井様に差上げて、お前にはこの店の暖簾^{のれん}を譲り、お吉が姉の

ような我儘を言わなければ、ゆくゆくはお前と一緒にしてやりた

い——と」

こう言つた市太郎は、言い過ぎに気がついたらしく、急に口をつぐんでしまいました。

四

自身番には、腰縄を打ったやくざの万次が預けてありました。

二十五六のいなせな男で、物言いもハキハキして、いかにも若い町娘に好かれそうですが、才氣走っておつちよこちよいで、あまり頼母たのもし氣げではありません。

「お前は清水屋のお君を殺した疑いで縛られていることは知つてるだろうな」

平次は万次の顔を見ると、いきなりこう突っ込んだことを訊きくのでした。

「親分、あつしがそんな馬鹿なことをするかしないか、よく考えて下さい。昨夜お君と夜逃げゆうべをして、小田原まで飛ぶつもりで、支度までした者が、その相手を殺してもいいものでしょうか。親分」

万次は泣き出しそうな声を出すのでした。

「それじゃお君を怨うらんでいる者の心当りがあるだろう、——お君は不斷そんな話をしなかったのか」

「お君はそう言いましたよ。私を一番怨んでいるのは、伊賀井様の奥方だろう——と、私のために気が変になったというから、義理にも同じ屋根の下には住めない——とも言っていました」

「清水屋の養子の市太郎のことは、何と言っていた」

「心の中では私を怨んでいるだろうが、顔色にも出さないから、あの人は気味が悪い、——でもあの人は、どうかしたら妹のお吉の方を好きかもしれない——そんなことも言っていました」

「お前が福寿院の境内でお君と会う約束のあったことを、誰か知っていたのか」

「誰も知ってるわけはありません、——それを知っている者があれば、あつしはお君を殺した疑いで縄なんか打たれずに済んだことでしょうが」

万次はことごとく萎れ返っております。これが筋彫の刺青などを見栄みえにして、やくざ者らしく肩肘かたひじを張っていたのが可笑おかしくなるくらいです。

「ほかにお君を怨んでいる者の心当りはないのか」

「伊賀井の御用人ごようじん、竹林金吾という方が、ひどくお君を憎にくがつ

ていたそうです」

「伊賀井様お屋敷内に、お君やお前が知っている方はないのか」

「お女中のお初さん、——まだ若い働きものですがね、お屋敷の内外を一人で切つて廻して、よく買物や用達ようたしに出るので、お君とも懇意にしていたようです」

万次から訊き出せるのはこんなことでした。これだけではまだ、万次の縄を解いてやるわけにもいきません。

植木屋の辰五郎の家は、新堀江町しんほりえちよう寄りの裏店うらだなで、平次が

行った時は、まだ女房のお滝の死骸もそのまま、辰五郎は死んだ

女房の床のとこ前に、大胡坐あぐらをかいて茶碗酒をあお呷おつているところでし
た。

ろくな親類もある筈はなく、町内付き合あいもいい加減で、合あいな
長屋がやの月番の老爺おやじが、お義理だけの顔を出して、へべれけの辰
五郎もりのお守を、迷惑ありさまそうにやつているという、いかにも慘憺さんたんた
る有様です。

「御免ごめんよ」

「誰だえ、——悔くやみに来たのなら、ズイと入りな。線香だけはフ
ンダンに用意してあるよ。もつと尤も夏なつに買つておいた蚊やり線香だが、
ほとけ仏は文句を言わねえから間に合わねえことは、あるめえ」

「たいそうな元気だね、親方」

平次も少しタジタジでした。

「何を言^{いい}やがる、女房が死んでメソメソするようなお人柄じゃねえよ。年^{ねん}が明けて品川から駆け込んだのは三年前だ。お互^{たがい}によくも辛抱したものだ、我ながら仏様の前^{めえ}で感心しているとろなんだ、——おつとどっこい、拝むのは御自由だが、香^{こう}奠^{でん}を忘れちやいけねえよ」

「親方、あんまり威張ると引つ込みがつかなくなるぜ。銭形の親分が調べに来^きたんだ」

見兼ねた八五郎は、この自棄^{やけ}で呑^のんでいるらしい植木屋の耳に囁^{ささや}きました。

「何？ 銭形の親分？ そいつは知らなかった、——相^{あい}済^すみませ

ん。勘弁しておくんなさい、——お滝と来た日にや、大酒呑みで
 手が早くて、欲が深くて嫉妬やきもちで、生きているうちは始末の悪い
 女房だったが、死んだとなるとやつぱり淋しいや。ね、親分さん」
 「長屋の奴等は薄情だから、鼻糞はなくそほどの香糞を月番の老爺に届
 けさせて、ろくに面つらも見せねえ。——そこへいくと伊賀井様の人
 たちは届くぜ、御用人の竹林さんは御殿様からという口上付で香
 糞が一朱、自分の別はに二百文」

「——」

「三千石の大世帯で一朱はケチだと思うだろう、俺もそう思った
 よ、最初はね。ところが驚いちやいけないよ、奥方のお使いでや
 って来たお初さんは、ピカリと光らせたぜ。帰ってからそつと開

けてみると、小判で三両、ほかにお初さんの分が一分——山吹色のできたての小判だぜ。ね、親分、三千石の奥方はさすがに大気^{たいき}なものだろう」

辰五郎の繰言^{くりご}は際限もなく続きますが、平次はそれをいい加減にあしらって、お滝の死骸を一応調べました。

多分昨夜^{ゆうべ}のままらしく、血潮に染^そんだ衾^{あわせ}のまま、床の上に横たえた死骸は、亭主の辰五郎と同年輩の三十前後、でしょうか。生きてゐるうちは、ずいぶん美しかったに違いありませんが、すきんだ生活と氣持が、その顔容^{かおかた}ちまでも荒れさして、意志の働かない死面^{しめん}の凄まじさは、平次も思わず顔をそむけたくらい。蒼白く整った顔からは、芬^{ふん}々^{ふん}として妖氣^{ようき}が立昇^{たちのは}るような氣がする

のです。

傷はお君の場合と全く同様、細い刃物で背後うしろからひと突きに突き上げたものですが、お君の場合は思い切り抉えぐつてあるのに、これはただ突いただけで、同じく致命的なものであつたにしても、大変な違いがあります。

「刃物は？」

「俺が預かつてあるよ。これだ、——お滝の背中に突つたつていたんだ」

弁慶の小助は、懷中からクルクルと紙に包んだ、細身の短刀を出して見せました。朱塗しゆぬりに螺鈿らでんを施した美しい鞘さやまで添えてありますごてんづとが、御殿勤めの女中などの持った品らしく、脂あぶらが乗つて

曇つてはおりますが、作はなかなか良いものです。

「鞘はどこにあつたんだ」

「お滝の死骸の側そばに落ちていたそうだよ」

弁慶の小助は答えてくれます。

「ところでこの短刀に見覚えはないのか」

平次は辰五郎の酔すい顔がんの前に、その斑はん々ばんたる得物えものを突きつけ

ました。

「知ってるわけはねえ」

「お滝の物じやあるまいな」

「そんな物を持っていれば、とうの昔に質に置いて呑むよ」

手のつけようはありません。

五

お滝の殺された路地を見て、近所の人にも詳しく^{くわ}あ^{あた}つてみましたが、昨夜酉刻半^{むつはん}（七時）少し過ぎ、火の番の拍子木が通つて間もなく、悲鳴を聞いて近所の人が駆けつけると、湯帰りらしいお滝が、ドブ板を枕にして、紅に^{あけ}染^そんで死んでいたというだけのことです。

月がなかったので、誰も曲者の姿を見た者もなく、死骸を発見したのも多勢がいっしょで、一番先に誰が駆けつけたのやら、そんなことは少しもわかりません。

「これは驚いた。この殺しには下手人はないよ」

もとの清水屋へ帰つて来た平次は、誰へともなくこう言うのでした。

「やくざの万次は？」

弁慶の小助は聞きとがめました。自分の縛つた万次が無実では、少しばかり面目にかかわります。

「夜逃げの相手を殺す筈はないと思うがどうだろう、——お君はわざわざ着換えまでして、万次といつしよに逃げ出す気で飛び出している」

「市太郎は？　親分」

「あの男は尤^{もつと}もらし過ぎて怪^{あや}しいが、お君はどっちみち自分のも

のにならないと諦めている様子だ。それに福寿院の境内からも、万次の後で引揚げている」

「すると？」

「お君を殺したのと、お滝を殺したのは、同じ下手人らしいが、刃物の使い方に変ったところがある、——それに物奪り^{ものとり}ではないし、怨みと思つたところで、若い娘が相手だから、色恋のほかにはない」

「——」

「お君を殺して直ぐ^すお滝を殺せるのは、万次のほかにはないことになるが、お君の死骸の側にウロウロしていた万次は、その足ですぐお滝を殺したとは思われない」

「――」

「どうだ八、こうなると下手人がなくなるだろう」

「へエ、やっぱり 鎌 鼬^{かまいたち} かなんかで？」

「江戸に鎌鼬はいないよ」

「じゃ、どうするんです、親分」

「最初からやり直しだよ」

平次は深々と腕をこまぬくのでした。

「驚いたね。見当だけでもつきませんか」

「つくよ。お君を殺したのは、武芸の心得のあるものだということだけはね。細身の短刀でただ突き上げただけじゃ、あんな傷にはならないよ。下からえぐり気味に突いたのだ――ところが、お

滝の傷はただ猪突きに真つ直ぐに突いている、——これはどういうわけだ」

「？」

「時刻も煙草三服とは違っていない。場所は一丁も離れていないし、——お君が殺された時分、万次と市太郎は、福寿院の境内にウロウロしていた筈だ。そして二人が清水屋の裏木戸へ来た頃、あべこべの方角の御飯屋横町の入口でお滝が殺されているんだ」

「ともかくもう一度順々に、掛り合つた人たちに会ってみよう」

平次は清水屋へ入って行くのです。

「親分」

「なんだ、八」

「清水屋の主人が、娘が死んだ上は三百両の支度金を留め置くわけにいけないから、あの金を伊賀井様にお返ししたいが、使つかに行いく者が無い——とこぼしていましたが、あつしが行つてやつても構わないでしょうね」

「何を嗅ぎ出したんだ」

平次はこの八五郎の申し出の裏に、事情のありそうな匂いを嗅いだのです。

「なんでもありませんがね、お君を遠とおめがね眼鏡で見たという、日本一の助平野郎の顔も見たいし」

「馬鹿なことを言うな」

おおよきもち

「大嫉妬のあばたの奥方にもお目にかかりたいし、用人の竹林

なんとか野郎の面も見ておきたいし、それから、女中のお初つらというのは、奥方が嫁入りの時ついて来た女で、良い年増で腕が出来て、その上忠義者と聴くと、ちよいと当つてみたくなるじゃありませんか。お滝の背中に突つ立っていたのは、御守ごしゅでん殿好みの細いあいくちヒ首あいくちでしよう」

「そんなことに眼をつけたのか。修業のためだ、行つてみるのもよからうが、相手が悪いから氣をつけろ。十手などをチラつかせるととんだ目に逢わされるぜ」

「心得てますよ。清水屋の亭主の妹の姉の亭主の甥おいの伯父さんみたいな顔をして行きますよ」

八五郎はそんなことを言いながら飛んで行きました。

六

平次は克明こくめいに二度目の調べを始めたのです。その後から胡散うさんの鼻をふくらませて、弁慶の小助がついて来たことは言うまでもありません。

お君の死骸はこのとき親類方や御近所の衆の手を借りて、入にゆう棺かんされるところでした。その前にひと眼、この清らかな死骸を見せて貰った平次は、念のため背中の凄まじい傷、——蠅化ろうかしたような蒼白い凝脂ぎようしに、痛々しくも残る傷を見て、多勢の人たちを眼顔めがおで隣の部屋に追いやり、父親の市兵衛といっしよに残つて

いる、妹娘のお吉に、ささやき加減に訊くのです。

「お前は確かに姉さんたしの声を聞いたのだな」

「え」

「そして手てしよく燭を持って飛び出した時は、姉さんはもう口をきけなかった？」

「井戸端の石の上に俯うつむき向になつていました。もう正気もなかったようです」

「姉さんの背中に、刃物が突つ立っていた筈だが——」

「あつたようでした」

「それを誰が抜いたのだ」

「さア——」

お吉は黙ってしまいます。

「お前は木戸の方へ逃げて行く人影を見たと言ったそうだな」

「確かに見ました」

「着物か、人相かに覚えはないか」

「女のようにでした」

「どうして女とわかった」

「唯^{ただ}そう思っただけで」

小娘の記憶はこれ以上にはよみがえりません。

「有難う、いろいろのことが解^{わか}ったよ。もうみんなここへ呼入れ

ても構わない——御主人にはもう少しききたいことがあるが」

平次は庭へ滑^{すべ}り出ました。後ろからついて来た小助と市兵衛。

「御主人、娘たち二人の仲は好よかつたのかな」

庭木戸のところに立止つて平次は妙なことを訊たずねます。

「仲の好いい姉妹でした。世間様の褒めもので、——姉のお君はどつちかと言えばお人好しで、やくざの万次などにまで騙だまされまして、妹のお吉は顔に似合わぬ氣き性者で、姉を伊賀井様に奉公に出すのも、万次風情ふぜいと親しくなるのも、ひどく嫌がつておりました」

市兵衛の話はかなり平次の壺つぼにはまった様子で、そこから弁慶の小助と二人、調べの筋をくり返して、もういちど自身番へ向つたことは言うまでもありません。

「万次、お前のような嫌いやな奴はないな」

やくぎの万次の顔を見ると、平次はいきなり、唾つばでも吐きかけそうにするのです。腰縄は解きましたが、まだ小助の子分二人に付添われて、自身番に留とめ置かれた万次は、平次の一喝かつを喰くらつて、

「何が悪かったでしょう、親分」

ヒヨコヒヨコと卑ひきよう怯らしく頭を下げるのでした。

「お前はお君殺しの下手人にされているんだぜ。いいか、——お君を殺さないという確かな証拠は一つもねえ」

「？」

「お前は本当にお君と小田原へ逃げる気だったのか」

「それは、もう親分」

「お滝はそれを知っていたのか」

「えッ」

「隠すな、お前はお滝と変な噂うわさを立てられて、ひと騒ぎしたのはツイ半はんとし歳前のことじゃないか」

「そんなことまで御存じで、——みんな申上げてしましましょう、——実はお君を伊賀井様へ上げのことを考え出したのはお滝の智恵で、あらゆる手立てを考えて、あつしとお君の仲を割さこうとしたのです。でも、とうとうあつしが勝ちましたよ。いよいよ明日はお君を伊賀井様へ連れて行くという前の晩、二人は道行みちゆきをする段取になったのです。でも狐のように疑い深くて、二人をつけ廻していたお滝は、それを嗅ぎ出さない筈はずありません。お滝はどんなことをしても二人の道行を留とめようとかかったのです。あ

の女が殺されなきや、どんな業わざをしたか知れたものじゃありません」

万次——弱そうな色いろあく悪の万次は、胴顫ぶるいしながらこんなことを言うのでした。よくよくお滝には懲こりた様子です。

「昨夜ゆうべお前はお滝に会わなかったのか」

「会いません。逃げて歩いていたんで」

万次は意気地なくも首筋などを搔かいております。

平次は万次から引出せるだけ引出すと、順序を追つてもういちど植木屋の辰五郎の家へ。

「親分方、いらつしやい。酒が集まっているから、こんどは唯ただじや帰さないよ。ゲープ」

相変らず仏様の前に大胡坐で、茶碗酒を呷あおっている辰五郎です。

「少し訊きたいが」

平次はその前に腰を落しました。

「へエ、なんなど訊いておくんなさい。仏様にはとんだ供養くようだ、どんなことでも白状するぜ」

「親方かみのところの神さんは、もと武家の出だと言ったね」

「言いましたよ。武家も武家、なんとかの守かみの御留守居おるすいで、一時は大名のような暮しもしたと、お滝は威張いばっていましたよ。それがなんでも悪いことをして腹を切らされ、母一人娘一人でたいそう苦労をした揚句あげく、親孝行のために品川へ身売りをしたんだ——と言いましたが、嘘うそを吐つきやがれ、己うぬが放埒ほうらつで好きな女郎にな

りやがつたんだらう——て言つてやりましたよ」

「それから」

「あの通り良いきりようでしたが、大酒呑みで嘘つきで、嫉妬やきもちがひどくて氣違い染みていたから、客の方から逃げ出して、年ねんが明けても落着く先もなく、着のみ着のままでここへ転ころげ込んで来ましたよ」

「で？」

「近頃はあつしの出入り先の伊賀井様に喰い込んで、清水屋のお君坊をお妾めかけに世話して、たんまり纏まとまった礼をせしめるんだと言つていましたかね」

「ところで、そのお滝さんは、武芸がよくできたというじゃない

か」

「自慢でしたよ。娘のころ江戸のお屋敷で長刀ながなたのひと手、柔術やわらから小太刀こたちまで教わり、家中かちゆうでも評判の腕前だったってね。その代り亭主野郎のこのあつしが散々で、腹を立てて取っ組合を始めても勝てつこはねえから情けない。万次と変な噂をたてられた時だつて、幾度むしり合つたか知れないが、負けは何時いつも此方こつちなんだ。ヘツヘツ、みつともなくてお話にもなりやしませんや。仏様の前だから供養のために言うようなものだが——」

辰五郎の酔態は、まさに爛漫らんまんたるものでした。

「お前は先刻さつき、あの短刀を知らないと言つたが、——ありややつぱりお滝の持物じゃないのか」

平次はこの酔態へ釣り気味に訊ねました。

「まさにその通り、ありや女房の虎の子にしていた、お袋の形見だよ。何べん口説くどいても、あればかりは質に入れさせなかつた品で」

「どうしてそれをお前は知らないなんて言つたんだ」

「面倒臭めんどうくさかつたんですよ、親分。掛り合いで引張り出されると酒の味が悪くなるからね、——が、もう酒もたくさん、言うだけのことをみんな言つてしまえば、あつしも気が軽くなるというもので。御免よ、親分方。あつしはちよいと横になるぜ」

辰五郎はコロリと横になると、女房の死骸の前に、大きなイビキのレクイエムを上げるのでした。

七

「ワッ、驚いたの驚かねえの」

八五郎は鉄砲玉のように飛んで来て、平次と鉢合せをしそうになつて、クルリと廻つて羽目板を力にようやく立直りました。

「何を大騒動するんだ。まるで四谷の伊賀町の路地へウワバミでも出たようじゃないか」

平次はそれを迎えてニヤリニヤリしております。後ろにキョトンとしているのは、何が何やら見当のつかない弁慶の小助の偉大な肉塊につかい。

「いきなり引っこ抜いて、ピカリと来ましたぜ。あの用人の竹林というのは、年寄りのくせに恐ろしく気が早い」

「何をやって脅かされたんだ」
おど

「この八五郎が、三百両の支度金を持って乗込んだところは、大した武者振りでしたよ、親分。見せたかったな」

「ピカリと来ると、逃げ出すようじゃ、拝見しない方が無事らしいぜ」

「用人のはげあたま禿頭に三百両を叩き返して、サテと改まりましたよ、

——遠眼鏡で町娘を御覧になって、奉公に出せなんて無理を言

うからこんなことになるんだ。お君を殺したのは間違ひもなく武芸の心得のある女だ——お君を生かしておきたくない人間が、こ

のお屋敷の中にいるに違いない、その顔を見なきや一寸もここは動かない——とね、大した啖呵たんかだったぜ親分」

「そうだろうとも、見なくてとんだ仕合せさ。屁っぴり腰でガタふる顫えながらの啖呵なんざ——ところで、お前はお君を殺した下手人は誰と見当をつけたんだ」

「あの用人の竹林でなきや、奥方付のお女中で、腕の立つた忠義者のお初ですよ。それに決っているじやありませんか、大事の大事の大あばたの奥方を氣違いにした町人の娘を、屋敷へひと足も踏み込ませるものかと思つたに違いありません。女持のあいくちヒ首あいくちかなんか持出して、清水屋の井戸端でお君をひと突きに殺し、取つて返して御飯屋横町で、女衞ぜげんみたいなお滝を刺した、——かがみや鏡

山^まの芝居だって、下女のお初は忠義者ときまつているじゃありませんか」

八五郎はまさに、そう信じきっているのです。

「お前は伊賀井家へ乗込んで、そんなことを言ったのか」

「言いましたとも、相手は三千石の大身だ。脅かしかも分らないが、幸い三百両の餌^{えさ}があるから、用人の禿^{はげ}頭^{あたま}を前にして、奥

まで響くように、精いっぱい大声で立て読み一席やりましたよ。

あれだけ張り上げれば、大川の向うへだって聞えまさア。遠眼^{とめが}

鏡^ねの殿様も大あばたの奥方も、一から十まで聴いたに違いない」

「それからどうした」

「無礼者、そこ動くな、ピカリと来ましたよ。首筋をかすつたよ

うだが、傷はありませんか、親分」

八五郎は自分の首筋へ唾つばなどなすつているのです。

「馬鹿だなア」

「それから一目散いちもくさんに飛び出した。——懐中ふところの十手を取り出す

わけにもいけないから、逃げの一手だ。石燈籠いしどうろうを蹴散けちらして植うえこ

込みをくぐつて、裏門を出るのが精いっぱい」

「呆あきれた野郎だ。だから俺は余計なことをするんじゃないと言つ

たろう」

「だって女二人まで殺してヌクヌクと——」

「誰が女二人を殺したんだ」

「あの味噌摺みそすり用人でなきや、下女のお初」

「違ふよ、八」

「へエ？」

「弁慶の親分も聴いてくれ、——俺は今、下手人の名を打ち明けるから、決して縛らないと約束してくれるか」

「そいつは変じゃないか、銭形の」

「じゃ、黙つて俺は神田へ歸るばかりだ」

「約束するよ、——お君を殺したのは誰なんだ」

弁慶の小助も不承不承に平次の条件を容れるほかはありません。

「お君を殺したのは、辰五郎の女房お滝だよ」

「え、あれは大事の金の蔓つるじゃないか」

「その金の蔓が、自分の男を奪とつて、小田原へ逃げ出そうとして

いる。お君と万次が道行をきめると、一番馬鹿を見るのはお滝だ。
 昨夜^{ゆうべ}二人が逃げ出すと覺^{さと}つたお滝は、湯へ行くといい拵^{こしら}えて、秘
 藏の短刀まで持出し、清水屋の裏に忍んで、お君が着換えて飛
 び出したところを後ろから突き上げるように抉^{えぐ}つたのだよ」

「なるほどね——すると錢形の親分の前だが、お君殺しの下手人
 は縛るわけにいかねえ——ところで、そのお滝を殺したのは誰だ」
 弁慶の小助はすっかり感に堪^たえます。

「お吉だよ」

「えッ」

「お君の妹のお吉さ、——あの娘は優しい顔をしているが大した
 氣^き性^{しょう}もの、——姉の悲鳴を聴いて手^て燭^{しよく}を持って飛び出すと、

姉は井戸端で殺されて、曲者は木戸の外へ逃げるところだ。その顔か姿を、お吉はチラと見たに違いない。姉の背に突き立っている短刀を引抜いて追っかけ、御飯屋横町でお滝に追い付いて、物をも言わずに後ろから刺し、そのまま逃げて帰ったところへ父親が来たのだろう。万次や市太郎が来たのは、それからまた後だ」

「本当ですか、親分。あの娘が、あの可愛らしい——」

「間違いはないよ。他^{ほか}にお君を刺した短刀を引抜いて、お滝を刺す人間はない筈だ。短刀はお滝の物だ。お滝は太^ふえ女だがさすがにお君を殺したところへ、お吉が手燭を持って出て来たので、あわてて短刀を抜かずに逃げたのだろう——証拠はいくらもある。お君の背に刃物の突っ立っているのを見たのはお吉だけだし、下

手人の逃げて行くのを見たのもお吉だけだ」

「へエ、あの娘がね」

「さア、帰ろうか八、——なに？　もう一度お吉の顔を見てくる

？　止せよ。^よここからではもう遠眼鏡もきくまい、——それじゃ

弁慶^{べんけい}の親分、跡^{あと}は頼んだぜ。他の者なら、あんなことを言わな

いが、弁慶の親分だから、ツイ余計なことまで打ち明けてしまつ

たよ。あとは神様のお白洲^{しらす}にまかせようじゃないか、じゃ」

平次は弁慶の小助に手を振って、御見付^{おみつけ}の方へ引揚げて行くの

です。後からはヒヨコヒヨコと八五郎が、——初冬の昼下がりの

陽ざしはポカポカと首筋を暖めるのでした。

青空文庫情報

底本：「奇譚 錢形平次 「錢形平次捕物控」傑作選」P H P 文庫、P H P 研究所

2008（平成20）年10月17日第1版第1刷

底本の親本：「錢形平次捕物全集 11」河出書房

1956（昭和31）年9月30日初版発行

初出：「旬刊ニュース 増刊第3号」東西出版社

1948（昭和23）年11月1日

※副題は底本では、「遠眼鏡《とおめがね》の殿様」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

遠眼鏡の殿様

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>